

木田市長の

どろんどろんと
コミュニケーション



市民による新たな取り組み

Vol.108

鳥羽のまちなかがだんだんと寂しくなつて、シャッター街に変わつてしまふことは、とてもつらいことです。空き店舗を活用してお店を開いたり、起業したりする場合には、市から補助金を出す制度を設け、活用いただいたかたもおりますが、大きな効果は出ていないのが現状です。

せめてシャッターの代わりに普通の住宅のようなドアや窓にしたら、見た感じは良くなるのに、などと考へたりしました。シャッターをやめてドアや窓にしたり、飾り窓をつくつたりする費用を補助してはどうかというアイデアを出したりもしました。

つい最近、ある同窓会があ

つて鹿児島を訪れました。鹿児島中央駅の前に一番街というアーケード街があります。実はそこでもシャッターが多く閉まつていました。南九州最大の街でさえこんな状態なのかとびっくりしました。以前から私は「行政のできることは限りがある。そこに住む人たちの考えやパワーで何とかしようとするのが大事だ」と言い続けてきました。もちろんそうならば行政も大いに協力はすべきですが。

このような状況のなか、「鳥羽なかまち」というパンフレットが突然、世に現れました。デザインも中々うまくできていて、内容も探せばこんなに魅力的なお店や名所があるんだと驚かされました。いよいよ

よ住民パワーが立ち上がった。きたという印象を受けました。そして先日、鳥羽なかまちの中心メンバーのひとりのかたと話をする機会がありました。彼女には行政に頼ろうとする気配はみじんもなく、ここに住む自分たちで、様々なアイデアを出して、まちを活性化したいという気持ちがひしひし伝わってきました。彼女は自分の考えと費用で、シャッターを改造して、もつと魅力的なものに変えたいと言われていました。普段私自身が考えていることと一致した意見を聞かされ、とても嬉しくなりました。伝統的な建物が並び、電線も地中化されたようなよその景観地区に比べ、今の鳥羽の状態では、中々街のそぞろ歩きを期待するのは難しいとあきらめかけていました。

しかし「鳥羽なかまち」の取り組みを知つて、そこに住む住民が自分達のまちの魅力を発見し、改善しながら誇れるまちづくりをしてゆけば、次第に加速度が加わり、まちなぎやかさが戻ってくるかもしれない。



Vol.136

絵本

全国の絵本専門店・書店の児童書担当者が選ぶ「MOE 絵本屋さん大賞2014」に「へいわつてすてきだね」という絵本が選ばれました。この絵本は、昨年の沖縄全戦没者追悼式にて読みあげられた、沖縄市在住の小学2年生、安里有生君の詩を絵本作家の長谷川義史さんが絵にしたものです。

「へいわつてすてきだね」
『へいわつてなにかね。ぼくは、かんがえたよ。おともだちとなかよし。かぞくが、げんき。えがおであそぶ。ねこがわらう。おなががいつぱい。やぎがのんびりあるいてる。けんかしてもすぐなかなあり。ちようめいそうがたかさんはえ、よなぐにうまが、

ヒビーンとなく。みなとは、フェリーがとまつていて、うみには、かめやかじぎがよいでる。やさしいところがにじになる。
へいわつていいね。へいわつてうれしいね。みんなのころから、へいわがうまれるんだね。

せんそうは、おそろしい「ドーン、ドカーン。」ばくだんがおちてくるこわいおと。おなががすいて、くるしむこども。かぞくがしんでしまつてなくひとたち。ああ、ぼくは、へいわなときとうまれてよかつたよ。このへいわが、ずっとつづいてほしい。みんなのえがおがずっと、つづいてほしい。

へいわなかぞく、へいわながつこう、へいわなよなぐにじま、へいわなおきなわ、へいわなせかい、へいわつてすてきだね。

これからも、ずっとへいわがつづくようにぼくも、ぼくのできることからがんばるよ。』

絵本は優しさや、思いやりなど、たくさんを教えてください。一度、図書館でお気に入りの一冊を探してみたいかがでしょうか。